



Title	台湾出土の越窯系青磁
Author(s)	盧, 柔君
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 49-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105028
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

台湾出土の越窯系青磁

盧 柔 君

はじめに

中国陶磁器は8世紀末から9世紀初頭を境にして、各地での出土数が増加するとともに、越窯系青磁、邢窯系白磁、長沙窯系釉陶の組み合わせがみられるようになったため、東アジアにおける初期陶磁貿易の開始を示すと考えられている（亀井 1986）。とりわけ日本からの出土例の多さが際立っているが、その一方で、2017 年筆者により越窯系青磁の出土例がはじめて発表されるまで、台湾に初期貿易陶磁器の搬入は皆無と評価されていた（盧 2017a）。東アジア全体からみて比較的新しい台湾の出土例に関して、その文脈を検証することで、朝鮮半島や日本の舶載陶磁器とは異なった消費の観点を見出すことが可能と考えられる。そうした可能性の根拠を導き出すためにも、台湾における越窯系青磁の出土状況をまず明らかにする必要があると考える。係る研究の基礎に供するため、本稿では主に台湾における越窯系青磁の情報を明らかにし、今後の研究の発展の可能性について論じることとしたい。

1. 越窯系青磁の東アジアの分布状況と研究史について

初期貿易陶磁器の発見例は9世紀から多く数えられるが、なかでも越窯系青磁の出土数は邢窯系白磁と長沙窯系釉陶のそれを凌いだ。こうした豊富な実物資料の存在によって、越窯系青磁に関する活発な研究の基礎が築かれたといえる。

現在、越窯系青磁に関する研究は、主に中国、韓国、日本の考古学界において行われている。それらの共通点として、分類・編年を扱った研究を中心としつつ、流通ルートの検討が行われている。また、出土資料の特性やその文脈の違いなどによって、各地における越窯系青磁に関する研究は異なった側面が強調されている。

まず、中国では、生産地である窯跡の資料が基準資料としてあげられるため、消費地と違って使用期間の長さなどに影響を受けず、より緻密な編年研究を行う条件を備えている。また、消費地から出土した青磁の胎土や器種などの特徴から生産窯跡の同定（陳・馮 1960、馮 1980）、そして貿易港や沈没船の発掘調査結果と対照することにより、流通ルートの考察も進みつつある（李知宴 1982、林 2002、李鑫 2014）。とりわけ歴史的な諸背景を結合させて、陶

磁器の器形や製作技法、生産体制、貿易ルートの変化する要因を解釈し（陳 1956、鄭 1997）、歴史上の流れの中で陶磁器の変化を位置付けることが中国の陶磁器研究の特徴といえよう。

それに対して韓国では、越窯系青磁に関する出土数および分布状況を概観し、流通ルートとその歴史的背景に対する検討なども行われている（金 2016、李軍 2018、李明玉 2021）。しかし、中国産青磁の具体的な分類や分布を検討するよりも、むしろその製作的特徴を取り上げて高麗青磁との比較によって後者の起源を解明することが重視される。すなわち研究上では高麗青磁が主体で、越窯系青磁は副次的な位置にある（李喜寛 2009）。

一方、日本では型式学研究の歴史が長く、陶磁器の分類およびそれに密接に関係する編年研究に強みを持っている。2018 年の筆者の論文に整理されたように、越窯系青磁の分類は研究の趣旨によって異なる部分もあるが、目跡の位置によって年代区分し、施釉程度や胎土、器形の特徴によりさらに細分する場合が多い。そうした分類・編年研究に基づき、貿易ルート（山本 1991、田中 1994）や貿易体制の変化についての考察も行われている（亀井 1986）。その中で最も注目すべきは、それらの諸背景にともなった先に、越窯系青磁、もしくはそれを含む食器様式において、当時の日本社会・政治体制がいかに反映されていたかを考究することである。文献記録によれば、越窯系青磁が輸入された奈良・平安時代は、政治制度・精神文化に対する唐の影響が大きかった時期である。そこで、唐の最先端技術で作られた奢侈品である越窯系青磁と古代日本の官衙・寺社および富豪層を如何に結びつけることを解明するために、精製品と粗製品の差、そしてその出土傾向を明らかにする必要がある。その延長線において、平安緑釉陶器・灰釉陶器と越窯系青磁との模倣関係についても論じられている（伊野 1992、荒川 1992）。

以上述べた中国・韓国・日本の越窯系青磁に関する研究の特徴は、いずれもいわゆる「初期貿易」が盛んに行われた際に、当該地域の考古学において最も関心の高い課題を軸として組み立てられたものである。しかしその一方、東アジアの海域において陶磁貿易が繁栄する時代を迎えたにも関わらず、琉球列島と台湾における越窯系青磁の発見は一例もなく、2017 年まで皆無と認識されていた。そのため、上述の研究において、台湾は除外されていたのである。

台湾での出土例が徐々に蓄積してきた現在、不在であった型式分類や貿易ルートの論拠に台湾のデータを加えるのみならず、東アジアにおけるこれまでの出土状況と研究課題を振り返りつつ、台湾の越窯系青磁の出土状況と今後の研究の方向性をも検討すべき段階となっている。よって、以下で台湾における越窯系青磁の出土状況について概要を報告し、さらにそこに見られる問題点について提起することとしたい。

2. 台湾における越窯系青磁の出土状況

現在、台湾において越窯系青磁の出土が認められる遺跡は 4 か所が数えられる（図 1）。下

記出土例を述べる際に使用する型式分類は山本氏（2000）と筆者（2017b）によるものである。

（1）淇武蘭遺跡

淇武蘭遺跡は、台湾北東平野においてやや内陸で淇武蘭河が合流する場所に位置する金属器時代の遺跡であり、この遺跡では、空白層を挟んで2つの文化層があり、放射性炭素年代測定によると、下層の年代は約1400年前から約800年前まで、上層の年代は約600年前から約200年前までとなる（陳ほか2008）。一方、歴史文献を手かがりとして、17世紀に台湾北部を占領した植民者のオランダ人が残した文献記録を参照すれば、300年前に現在の遺跡の土地に暮らしていたのは原住民族のガヴァラン族であった。そこで、地層から観察できた特定の人間集団の連続性と合わせて論じれば、上層文化層はガヴァラン族と認識されている集団が残した物質文化、そして下層文化層はガヴァラン族の先祖となる集団のものといえよう。

第一次調査では、大量の在地土器と搬入陶磁器が出土しており、このほか石器、金属器、ガラスビーズやキセルと装飾品および動物・植物遺存体などもみられ、典型的な台湾金属器時代の遺跡とみられる成果が得られた。本遺跡は生業が農耕とされているが、搬入陶磁器が16世紀末から多くなったため、対外的交流はこの段階に明確化されたと考えられている。しかし、2010年に行われた第二次調査では、下層文化層から3点の陶磁器破片が出土し、それらの釉色・胎土や製作技術からみて、明らかに越窯系青磁および長沙窯系釉陶である。紙数の制限で、長

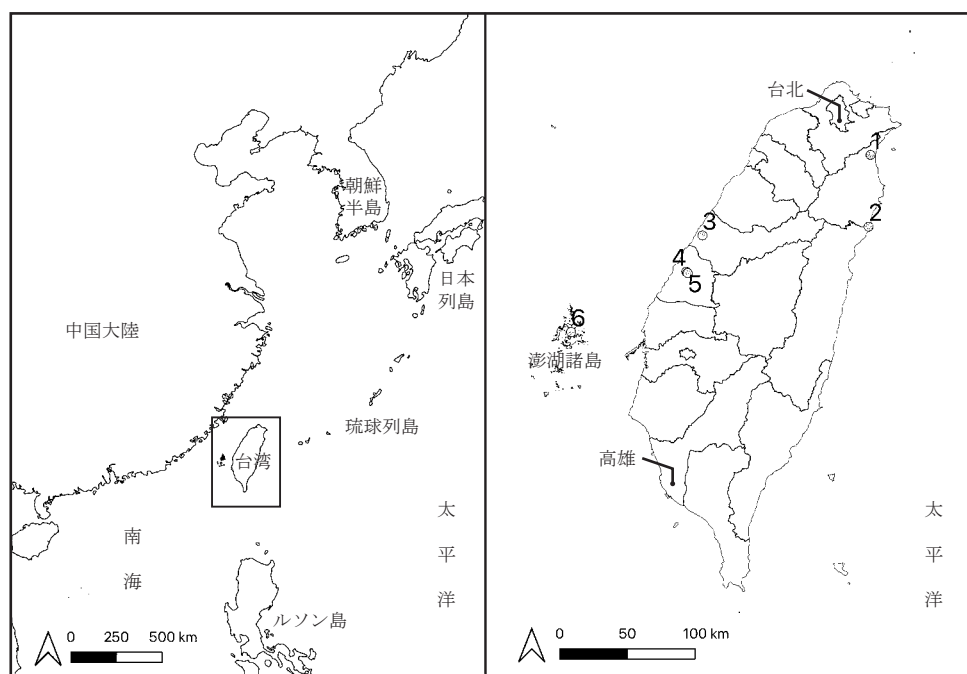
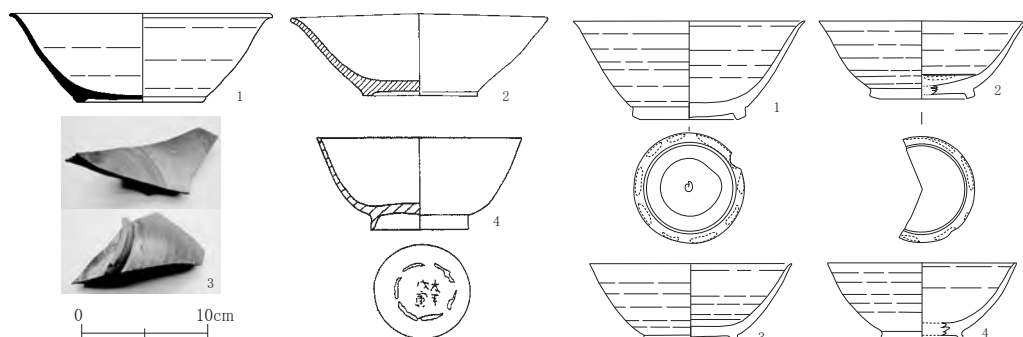


図1 遺跡位置図（1：淇武蘭遺跡、2：漢本遺跡、3：清水中社遺跡、4：菜園角遺跡、5：大有村遺跡）



1・3：淇武蘭遺跡出土青磁（陳ほか2008より作成）
2：中国臨安駱氏夫人墓出土青磁（浙文研2012）
4：上林湖窯跡表採（林士民・林浩2012）

図2 淇武蘭遺跡出土青磁とその同形青磁（S=1/6）

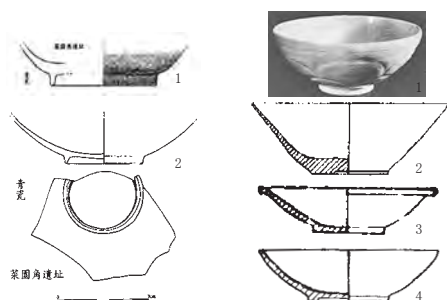
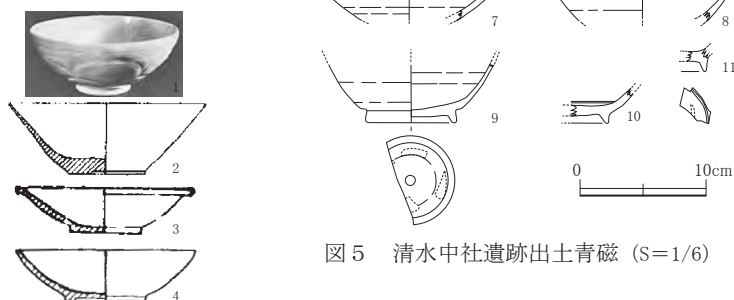


図3 菜園角遺跡出土青磁（S=1/6）（郭2017より作成）



1：張九齡墓出土（広文管1961）、2：和義路遺跡出土（寧文研1997）
3：河南唐墓出土（郭・樊1992）、4：王叔寧墓出土（鎮江博物館1985）
図4 年代基準としての青磁（S=1/6）

沙窯系青磁片に関する詳細は本稿で略すが、越窯系青磁片の情報を以下に述べる。

- ・図2-1は外反口縁で大型輪高台であり、口径21.1cm、底径10.9cm、器高7cmである。口径と比べて器高が浅い。胎土はやや赤褐色を呈し、白色化粧土をかけて全面施釉され、さらに高台畳付の釉を削り取っている。点状目跡は見込みと高台畳付に確認できる。釉薬や目跡の特徴から山本I-2aウ類、器形から盧A-b型2式に属する個体と判別できる。高台畳付に点状目跡がつくものは主に10世紀中頃までに製作されたもので（土橋1993、鄭1997）、同形品は天隆龍徳2（922）年銘のある中国臨安駱氏夫人墓（図2-2）に出土するため（浙文研2012）、当該資料の生産年代を9世紀末から10世紀初頭に絞ることができる。
- ・図2-3は復元底径7.4cmを測る。灰白色の胎土にオリーブ色の釉薬が全面施釉され、深碗で見込みに段を有する碗である。細長い目跡は高台内につく。釉薬や目跡の特徴から山本III-1a類、器形から盧D-a型3式に属すると考えられる。目跡の位置変化に関わる重ね焼きの技術転換は10世紀中頃に完成されたと考えられている（土橋1993、鄭1997）。さらに、上林湖窯跡から表採した太平戊寅（978年）銘のある底径7.8cmの青磁碗（図2-4）と器形が類似し、製作年代が10世紀中頃から11世紀初までに遡る。

（２）漢本遺跡

2017 年に発掘調査が終了した漢本遺跡は、淇武蘭遺跡と同じく台湾の北東部に位置する金属器時代の遺跡である。淇武蘭遺跡から南に約 60km、中央山脈が東側の海に面するやや陰しい斜面に立地している。本遺跡の年代は放射性炭素年代により約 1700 年前から約 1100 年前までである。また本遺跡はその特殊な立地環境に加え、台湾では発見の少ない錬鉄遺構および大規模な石敷き住居址の存在からもよく知られている。遺跡からは土器、石器、骨角器、金属器が出土しているほか、動物遺存体も数多く出土し、海外から輸入されたと思しきガラスビーズ、中国貨幣、施釉陶器などの陶磁器類も出土している（朱ほか 2017）。集落の主な生業が漁撈活動にあったことが推測されているが、遺跡の立地環境や数多くの舶載品の存在から、海外との交易活動が活発であったことも想定されている。

発掘調査報告書等ははまだ公表されていないが、調査成果に関する特別展示およびその展示図録等により越窯系青磁および長沙窯系黄釉壺（もしくは水注）の破片資料の存在を確認できる。越窯系青磁壺／水注については年代不明であるが、胴部に型押し花文を貼り付けた長沙窯系水注の年代は 9 世紀代と考えられる。

（３）菜園角遺跡・大有村遺跡

台湾中部西海岸の彰化平野にある鹿港溪という大河川に沿って遺跡群が点在している。その中の一つである菜園角遺跡においては 2009 年に発掘調査が実施され、金属器時代後期から近現代までの人々が暮らしていたことが明らかとなった。放射性炭素年代測定により約 800 年前から約 300 年前までの年代が得られている。なお、当該遺跡における 17 世紀の住民はオランダ人によってバブザ族として記録された。本遺跡からは、台湾中部金属器時代後期の典型的な土器が大量に出土しており、石器・鉄器のほか、貝製装飾品、メノウ玉、陶磁器も少量出土している。これら出土遺物の内容からみて、主な生業活動は農耕であり、狩猟と漁撈活動も副次的に行われていた。この遺跡から出土した陶磁器は明清代の青花が主体であるが、2 点の越窯系青磁碗底部破片が出土している（郭 2017）。

- ・図 3-1 は復元底径 8.3cm を測る。胎土が灰白色で釉色がより明るめの緑色を呈す。全面に施釉されるが高台内に目跡がついている。見込みの中心部に平坦面を設け、周りに沈線が巡る。器壁が直線で斜め上に立ち上がる深碗である。釉薬や目跡の特徴から山本Ⅲ-1a 類、器形から盧 D-a 型 3 式に属する個体と判別できる。先述した図 2-2 と図 2-3 と同様に、年代は 10 世紀中頃から 11 世紀初までに遡る（謝 2002）。
- ・図 3-2 は復元底径 6cm を測る。灰白色の胎土に黄味を帯びたオリーブ色の釉薬が全面に施釉され、器壁が斜め上へ立ち上がる無文の浅碗である。環状をなした細長い目跡は高台内につく。釉薬や目跡の特徴から山本Ⅲ-1a 類、器形から盧 B-a 型 3 式に属する個体と判別で

きる。和義路遺跡における 10 世紀後半の文化層からも相似の器形が見つかっており、製作年代は 10 世紀中頃から 11 世紀初までに遡る。

また、上述の菜園角遺跡から河川を渡った場所で大有村遺跡が見つかる（郭 2017）。ここで表面採集により越窯系青磁碗の底部破片 1 点の資料が得られている。黄緑色の釉薬で全面施釉され、見込みに環状をなした細長い目跡が認められ、高台畳付にも釉薬を削り取った後に同じ目跡がついている。こうした釉色・高台形態および目跡の特徴から考え、9 世紀末から 10 世紀前半にかけて製作された資料に位置付けることができる。

（４）清水中社遺跡

台湾中部西海岸の大甲溪と大肚溪という二つの大河川が形成した沖積平野の中央に清水中社遺跡は立地する。本遺跡では、6 回以上の発掘調査が実施されており、出土遺物には数多くの土器、石器、骨角器、動物・植物遺存体、少量の金属器、ガラスビーズと陶磁器が含まれている。放射性炭素年代により 2300 年前から 450 年前まで、同一の集団が生活していた姿が見えてくる（李作婷 2023）。17 世紀にオランダ人が残した文献記録を参考し、本遺跡に見出される生活の様相はパプラ族牛罵頭社およびその祖先の集団に帰属すると考えられている。かつて本遺跡からみた対外交流の活発化は、オランダ人が当地に進出する 17 世紀以降と考えられていたが、2019 年に国立自然科学博物館による発掘調査により 23 点ほどの越窯系青磁も出土したことから、旧来の見解に再検討の必要性が生じることとなった。

23 点の越窯系青磁の内訳として、5 点が図面復元できたほか、口縁部破片 5 点、底部破片 3 点、器形不明の胴部破片 7 点が含まれている（劉 2024）。

- ・図 5-1 の復元口径は 18.4cm、器高 9 cm である。器壁は直線に近い、外反口縁をなしている。褐色の胎土に砂粒が入る。黄緑色の釉薬で全面施釉してから高台畳付の釉薬を削り取る。見込みに環状をなす細長い目跡が認められ、高台畳付に同じ目跡がつく。外面にはロクロ回転の痕跡が認められる。口縁部に切り込みで五輪花を作り出す。釉薬や目跡の特徴から山本 I-2 エ a 類、器形から盧 A-b 型 2 式に属すると判別できる。

- ・図 5-2 は復元口径 16.2cm、器高 7.8cm、図 5-3 は復元口径 16cm、器高 7.4cm である。この 2 点は施釉程度や目跡の特徴は図 5-1 と同様であるが、器壁は丸みを持ちつつ斜め上に立ち上がり直口で収める。見込みには沈線が一周めぐり、釉薬、目跡と高台の特徴から山本 I-2 エ a と I-2 ア a 類、器形から盧 D-a 型 2 式に属する個体と判別できる。

以上の 3 点は寺竜口越窯跡で 10 世紀前半の文化層から類似する器形が見つかる（浙文研ほか 2002）、製作年代は 9 世紀末から 10 世紀中頃までに遡る。

- ・図 5-4 は復元口径 15cm、器高 6.4cm である。釉が黄味を呈するオリーブ色である。環状をなす細長い目跡が高台内につく。見込みの中心部に平坦面を設け、器壁が湾曲し上へ立ち

上がり、直口で収める浅碗である。釉葉や目跡の特徴から山本Ⅲ-1a 類、器形から盧 B-a 型 3 式に属する個体と判別できる。開元 28 (977) 年の張九齡墓から出土した青磁 (図 4-1) の器形 (広東省文物管理委員会ほか 1961) と類似しており、製作年代は 10 世紀中頃から 11 世紀初までに遡る。

- ・図 5-9 は口径、器高ともに復元できない。釉がオリーブ色を呈し、環状をなす細長い目跡が高台内につく。見込みの中心部に平坦面を設け、器壁が丸みをもちつつ上へ立ち上がり、直口で収める浅碗である。見込みには沈線を一周めぐる。釉葉や目跡の特徴から山本Ⅲ-1a 類、器形から盧 D-a 型 3 式に属する個体と判別できる。製作年代は図 3-1 と同様に 10 世紀中頃から 11 世紀初までに遡る。

上記の他検出された 8 点の青磁の口縁部破片のうち、5 点は口径が復元できるもので (図 5-5、図 5-6)、14.8cm ~ 16cm の間に分布している。いずれも日本で最も普遍的に出土している直口をもつ直壁碗に属し、山本Ⅰ類に相当するもので、器形から盧 A-a 型 2 式に属する個体と考えられる。和義路遺跡の 9 世紀中頃の文化層からも類似する器形 (図 4-2) が見つかっており (寧波文物考古研究所 1997)、製作年代は 9 世紀中頃までに遡る。残り 3 点のうち、2 点は復原口径が 15cm の外反口縁破片、器壁が湾曲する浅碗である (図 5-7)。山本Ⅰ類に相当し、器形から盧 B-b 型 1 式に属する個体と考えられる。器形が 9 世紀後半と考えられる中国河南唐墓から出土した青磁 (図 4-3) と類似し (郭・樊 1992)、製作年代は 9 世紀までに遡る。最終の 1 点 (図 5-8) は復原口径が 15cm の直口で器壁が湾曲する浅碗であり、山本Ⅰ類、器形から盧 B-a 型 1 式に属し、大中 2 (848) 年の王叔寧墓 (鎮江博物館 1985) で同形品 (図 4-4) が見つかっており、9 世紀に製作されたものと考えられる。

最後、残り 3 点の底部破片は、いずれも外傾する低い輪高台を持ち、高台内に目跡がつく特徴が認められる (図 5-10・11)。全形は不明であるが、その目跡の位置と高台形態の特徴から山本Ⅲ類と盧 3 式の特徴が認められ、10 世紀中頃以降に製作されたものと推測できる。なお、11 世紀以降に高さを増す高台の高さには及ばないことから (盧 2017)、下限年代を 11 世紀初頭と位置付けておきたい。

おわりに

上述の情報を整理すると、9 世紀代に台湾北部東海岸と台湾中部西海岸から越窯系青磁が合わせて 9 点が出土している。10 世紀前半に入ると、東海岸からは消え、台湾中部西海岸の集落遺跡から 3 点が出土している。続く 10 世紀後半はより 9 世紀の様相と類似し、台湾北東部および中部西海岸のいずれからも出土している。

台湾における越窯系青磁の出土の意義として、台湾考古学からの意義と東アジア考古学から

の意義の両方が考えられる。まず、台湾考古学の方面から考えると、約 1800 年前に台湾が金属器時代に入った際、外部からの搬入品としてガラスビーズと青銅器があげられる。それについての製作地／産地等の研究が行われてはいるが、交易する対象や対価がはっきりしないことから、対外交流が行われていたことの言明のみにとどまることが多い。輸入陶磁器に関してもっとも古い時期として宋代まで遡るものであったが、主体的に存在するのは明・清代からであり、稀に出土する宋・元代の陶磁器については、偶発的に台湾にもたらされたとししか解釈できなかった。金属器時代と歴史時代の境目となる 16 ～ 17 世紀前後に輸入陶磁器が急増し、陶磁器の産地・年代が同定できることから、歴史文献の記述と合わせて明清政府の政治的活動や、オランダ人の経済的野望を伴う交易活動により、台湾の対外交流が受動的に開始されたという説明がほとんどを占めていた。しかしながら、唐宋代の越窯系青磁の出土例が増えつつある現在、輸入陶磁器の年代が 9 世紀まで遡ることの説明はもちろん、その時期に誰が、どこから、なぜ台湾へと運んだのかという疑問を遺跡のコンテクストから解きほぐすことによって、台湾の金属器時代、この地に暮らしていた原住民族の祖先集団の対外交流や生活様相について、これまでにない豊富な解釈を見出すことが可能となると考える。

次に、東アジア考古学としての意義から考えると、越窯系青磁が最も多く出土している日本と朝鮮半島を例として比較するならば、越窯系青磁が運ばれた際、目的地である両地域にはすでに国家組織が成立していた。唐・宋という政治体との貿易活動もこうした統一的組織のもとでの規制（もしくは意図的な規制の回避）の中で行われていたことは確かであろう。越窯系青磁もこのような貿易活動で搬入され、そして限られたところに存在し、その分布は奢侈品として特定の社会的枠組みと連動して解釈される傾向にある。しかしその一方、唐宋代に併行して先史時代／金属器時代であった台湾では、一貫性を持った社会組織は認められない。その際に台湾に搬入された越窯系青磁がどのような役割を演じ、どのような価値をもって看做されていたのか、朝鮮半島や日本列島に暮らしていた人々とは全く違う意味で越窯系青磁を使用していた可能性も考えられる。そこで考古学上の消費の可能性と多様性をもった解釈の可能性もみえてくる。加えて、正式な発掘調査で出土した資料があり、調査報告からも詳しい出土状況などの情報を得られることから、さらなる研究の可能性も十分にある。それゆえ、台湾における越窯系青磁に関する研究は期待できると考えるのである。

紙数の制限もあり、本稿では台湾における越窯系青磁の出土例を報告し、それに関する研究の重要性を論じるにとどまる。本資料の空間的な復原および共伴遺物の検討を含めた総合的な検討を進めることが今後の課題であり、別稿にて再度詳しく掘り下げたい。本稿が東アジア考古学の視点から基礎的な情報として、少しでも貢献できれば幸いである。

謝 辞

福永伸哉先生のご退職を心よりお祝い申し上げます。私が日本に留学してから、台湾に戻って就職し今日に至るまで公私ともに先生に大変お世話になっております。先生が時間・空間的にマクロな視点でモノ・コトを捉える研究姿勢、国際研究への重視、考古学と現代社会の繋がりへの関心は、私へ多くの影響を与えてくれました。学部の授業で大切な発表機会をくださったことも、体調不良で倒れた時期に先生から頂いた励ましのお言葉も、今でもはっきりと覚えています。先生への感謝は言葉で尽くせませんが、先生から学んだアジア全体を通観する研究視点を試して、論文を献呈いたします。

本稿の作成にあたり、日本語の文章表現についてご協力頂き、資料調査について台湾国立自然科学博物館の劉克竑先生にご対応頂き、末筆ながら御礼申し上げます。

引用・参考文献

【日文】

- 荒川正明 1992「平安時代緑釉陶器の文様装飾—そのモデルとコピーの視点から—」『貿易陶磁研究』12 日本貿易陶磁研究会、鎌倉
- 伊野近富 1992「原型としての貿易陶磁とその模倣型について」『貿易陶磁研究』12 日本貿易陶磁研究会、鎌倉
- 亀井明德 1986「初期貿易陶磁器の諸問題」『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎、京都
- 田中克子 1994「北部九州における越窯系青磁粗製品について—鴻臚館跡出土遺物を中心として—」『先史学・考古学論究』龍田考古会
- 土橋理子 1993「日本出土の古代中国陶磁」『貿易陶磁 奈良・平安の中国陶磁』臨川書店、京都
- 山本信夫 1991「東南アジアの9—11世紀貿易陶磁」『貿易陶磁研究』11 日本貿易陶磁研究会、神奈川
- 山本信夫 2000『太宰府条坊跡 XV—陶磁器分類編—』太宰府市教育委員会、福岡
- 李明玉 2021「高麗時代の遺跡から出土する中国陶磁器の状況と特徴：韓国出土品を中心として」『国立歴史民俗博物館研究報告』223 国立歴史民俗博物館、千葉：pp. 313-338

【中文】

- 郭素秋 2017「彰化平原史前末期與 17 世紀跨部落勢力關係探討」『地下與地上的對話—十七世紀的台灣與周邊』中央研究院歷史語言研究所、台北：pp. 67-113
- 郭洪涛、樊有升 1992「河南偃師縣四座唐墓發掘簡報」『考古』1992（11）中國社會科學院考古研究所、北京
- 廣東省文物管理委員會・華南師範學院歷史系 1961「唐代張九齡墓發掘簡報」『文物』1961（6）文物出版社、北京：pp. 45-49
- 謝純龍 2002『上林湖越窯』科學出版社、北京
- 朱正宜・邱秀蘭・王佩珊・葉沛明・劉汎笛・劉益助編集 2017『「重見／建／現漢本」發掘階段成果特展展覽專輯』宜蘭県立蘭陽博物館、宜蘭
- 浙江省文物考古研究所・北京考古文博學院・慈溪市文管會 2002『寺龍窯越窯址』文物出版社、北京

- 浙江省文物考古研究所 2012『晚唐錢寬夫婦墓』文物出版社、北京
- 鎮江博物館 1985「江蘇鎮江唐墓」『考古』1985（2）中國社會科學院考古研究所、北京：pp. 131-148
- 陳萬里・馮先銘 1960「故宮博物院十年來對古窯址的調查」『故宮博物院院刊』1960（00）文物出版社、北京：pp. 104-126
- 陳萬里 1956『中国青瓷史略』上海人民出版社、上海
- 陳有貝・邱水金、李貞瑩 2008『洪武蘭遺址搶救發掘報告』宜蘭縣立蘭陽博物館、宜蘭
- 鄭建華 1997「越窯燒造工藝的初步總結」『東方博物』2 浙江大学出版社、浙江：pp. 88-95
- 寧波市文物考古研究所 1997「浙江寧波和義路遺址發掘報告」『東方博物』1 浙江大学出版社
- 馮先銘 1980「三十年來我國陶瓷考古的收穫」『故宮博物院院刊』1980（1）文物出版社、北京：pp. 6-30
- 李知宴 1982「越窯と銅官窯磁器の發展と輸出」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会、鎌倉：pp. 7-2
- 李鑫 2014「唐宋時期明州港對陶瓷貿易發展及貿易模式新觀察—瓜哇海域沉船資料的新启示」『故宮博物院院刊』2014（2）文物出版社、北京：pp. 25-38
- 李作婷 2023「臺中清水社口尾遺址發掘簡報與考古新發現」『南島研究學報』8（2）國立臺灣史前文化博物館、台東：pp. 1-37
- 劉克竝 2024『台中市清水區銀聯段 1839-0 號至 1839-50 號土地清水中社遺址南社地點發掘報告』國立自然科學博物館、台中
- 林士民 2002「試論越窯青瓷的外輸」『浙江省文物考古研究所學刊』5 杭州出版社、杭州：pp. 60-71
- 盧柔君 2017a「臺灣金屬器時代的島外交易模式初探：以洪武蘭遺址下文化層出土陶瓷為例」『2016 年台灣考古工作會報』國立自然科學博物館、台中
- 盧柔君 2017b「越窯系青磁碗的基礎的研究—器形・法量・文樣と燒成法」『待兼山論叢』51 大阪大學文學會、大阪：pp. 81-108
- 盧柔君 2018「越窯系青磁碗の型式學的再檢討」『待兼山考古學論集Ⅲ—大阪大學考古學研究室開設 30 周年記念論集—』大阪大學考古學研究室、大阪：pp. 753-765
- 【韓文】
- 金英美 2016「한반도 발견 오대 · 송 월요청자에 대한 일고찰」『동양미술사학』4 동양미술사학회、서울：pp. 207-240
- 李喜寬 2009「高麗時代의 靑瓷生産體制」『高麗陶瓷新論』學研文化社、서울：pp. 13-34
- 李軍 2018「백제 지역 출토 월요청자 및 관련 문제」『백제학보』24 百濟學會、전라남도：pp. 267-305